

ずっと小説家になりたいと思ってきた

小倉 一純

高校の頃つき合っていた彼女に「僕が札幌に行ってパチンコ屋の釘師になったらどうする？」と何度も尋ねたことがあった。

世間知らずの高校生が考えることだから、ろくなことではない。とにかく人生の裏街道を歩くことで辛酸を舐^なめ、それを原稿用紙に綴^{つづ}ろうと考えていたのだ。僕はその頃から小説家になりたいと思ってきた。

高校時代には、勉強もそっちのけで文庫本を漁った。SFや海外文学や日本の小説も、ひと通りは読んだ記憶がある。

僕には発達障害があって——後年五十歳を過ぎて判明する——、当時から本を読むのは苦手だった。だがそれは文字を追うという作業が不得意なだけで、本の内容には大いに興味を抱いていた。

彼女とは高校二年の三学期につき合いはじめた。教室で席がとなり同士になったのがきっかけである。僕はチューインガムに小さな手紙を忍ばせて彼女に渡した。愛の告白で

ある。翌日、朝のホームルームが始まる前に、彼女がとなりの席で、僕の方を振り向いて、こつくりと頷いた。うなずカップルの誕生である。

彼女の自宅は僕が自転車で通学する途中にあった。僕は毎朝彼女の家の呼び鈴を押し、そこから二十五分、ふたりで歩いて高校まで通った。

その彼女には、一浪の受験も近いある冬の日に電話で別れを告げられた。翌日、母親が出してくれた朝食の玉子焼きから昇り立つ白い湯気を見て、僕は猛烈に腹が立った。八つ当たりである。

彼女は、訳の分からないことばかりいい、将来性も感じられない僕に愛想が尽きたのだらう。彼女は医者の娘だった。

そんなことがあり、受験では二浪することになる。正確に言えば、一浪で不本意ながら入学した獣医学部に半年通い、その秋から僕は札幌の国立大学を目指した。

辛うじて合格したその大学には、恵迪寮けいてきという名物男子寮があった。毎年冬になると裸ふんどしに褌一丁の学生が二階から雪の中へ飛び込む。そんな蛮カラな校風で知られていた。小説家を目指す僕には相応しい校風だと思った。

その恵迪寮はひどく老朽化していたので、あるとき消防署の係官が訪れていった。

「火災が発生したら学生さんは消火しようとせずにすぐ逃げてください」

そのすぐ後で、寮は解体され場所を移して鉄筋の恵迪寮となった。

木造恵迪寮の最後の思い出は、ザ・ベストテンというTBSの番組がやって来たことである。

司会は久米宏で、東京のスタジオにいた。恵迪寮の現場には、女優の松坂慶子が、雪の中でスポットライトを浴びて立っていた。

その時、背後に群がる学生の誰かが彼女の身体をさわったというので、気丈な彼女が僕ら野次馬一堂を一喝した。

「誰よ！ あんたたちでしょっ」

その怒った顔がとても美しかった。

折しもその日は恵迪寮生による夜間の雪中飛び込みの日であった。

小説家といわず文筆家となるには大学時代にもたくさんの本を読まなければならない。例えば新聞記者になるのだって年に百冊、いや二百冊を読まなければいけない、と当時の就職雑誌かなにかで読んだことがあった。

大学時代も引き続き文学作品は読んでいたが、さすがにそんな数の本は読めない、と思った。僕は自信をなくしていった。

やがて、北国の单身生活の寂しさから、僕は居酒屋に通うようになった。

その居酒屋も、小説家志望らしくできるだけ場末の店を選んだ。人生の吹き溜まりだのような小さな酒場が僕の好みだった。もったも懐も寂しいから、そういう店以外に行くこともできなかったわけである。

行きつけの店では何度か修羅場を経験した。

ある晩、客同士の喧嘩けんかがあった。ちよつとした口論の末、かぶりを振って出ていこうとする男性の頭にビール瓶が振りおろされた。その中年は木枠の扉を開けたところで顔から前方へ崩れるように倒れ込んだ。雪の路地がぱつと鮮血に染まる。店のおばちゃんが駆け寄り素早く傷口を押さえるとほどなく救急車とパトカーがやって来た。僕は思った。作家となつた暁にはきつと今晚の顛末てんまつを書いてやろう。

僕は酒場がよいをするため、アルバイトに精を出さなければならなくなった。仕事は土木作業を選んだ。札幌で一番アルバイト料が安いというその造園会社の社長夫人は、「うちで働ければ、このあと、どんな厳しいところへ行っても大丈夫だから」とい

といい豪快に笑った。

本音をいえば、もっと実入りのいいアルバイトを選びたいという気持もあった。だが、当時の僕は**ずぼら**だった。大学の学生課に出か

けるタイミングがいつも遅かったのだ。それで毎年、同じ造園会社を紹介される羽目になった。家庭教師など、普通の学生が飛びつくような仕事には端^{はな}から関心が薄かった。

造園会社では、お得意先に札幌郊外の寺院があった。

その住職が暮らす庫^く裡の前庭^{まえにわ}の雑草取りを、僕ともうひとりのアルバイトが受け持った。彼は札幌市の自宅から小樽市にある商科大学に通っていた。

前庭はひょうたん型の島のようになっていて、中心あたりに石灯籠^{いしどうろう}が建っていた。その島の縁^{ふち}には得体の知れない深緑色の草が生えていた。芝生というよりも、ニラを思わせるものだった。

僕らにはそれが雑草か否か分からなかった。ほかにも素性の分からぬ植物が何種類もあった。

「この草どうする？ 一応ぬいておこうか」

「いやあ、ちよつと待ったほうがいいんじゃない――」

そうこうしているうちにお茶の時間になった。住職の奥様が氷を浮かべた麦茶を持ってきた。それをお盆ごと庭石の上へ置き庫裡へ戻ろうと踵きびすを返しながら、

「あなたたち、ほんとうに仕事がはやいわね」と一言いって立ち去った。

今思えば住職夫人のあの言葉は、手を休めてばかりいる僕らに対する嫌味だった。

あれから三十五年が経ち、僕は父がつくった猫の額ほどの庭を手入れするようになっていた。そこであのときの寺院の植物は「龍りゅうの髭ひげ」であることを知る。日当たりが悪くてもよく育つ。いわゆる下草したくさとして植える植物だった。

結局、大学時代、それなりに読書もしたのだが、そのほかに大した勉強もしなかった。

僕は経済学部だったが、リベラルアーツを標榜する母校では、文学部の講義も受講する

ことができた。教授がいった。

「そんなに文学に興味があるのなら、私のところへ書いたものを持って来なさい」

「……」

「個人的に見てあげるから――」

そんなチャンスもあったが、棒に振ってしまった。自分の気持に素直に向き合うことができなかった。第一、僕にはまったく自信がなかった。誰がなんといっても小説家になるのだ、という信念を貫くことができなかったのである。

かくして僕は、最大公約数的な発想であり、両親の願いでもあった、普通の会社のサラリーマンとなる道を選んだ。

それからは苦手な仕事に追われて、僕は本を読む時間をまったく持てなくなった。小説家になりたいと望んでいたことも遠い昔の出来事となっていた。

世紀末の二〇〇〇年、男の厄年四十二歳で、

僕は会社を辞めることになる。絵に描いたような散り時である。世の中はミレニウムに沸いていた。一方、僕の精神的な不調も頂点に達していた。

僕には、わずか二か月ではあるが、精神科の入院歴がある。二十九歳のときであつた。

薬を服用し休養した僕は、その翌々年には社会復帰を果たす。会社も、鉄鋼から精密機械へと転職をした。

だが、精密機械メーカーで働いているときに、行き詰まりやぼんやりとした不安を感じるようになっていた。

そんな気分を変える意味もあつて、その会社を一年で辞し、産業ガスメーカーへと転職をした。

事態は好転しなかった。調子はさらに悪化し、僕は都心の本社に通勤することができなくなった。会社はやむなく僕を地方の工場に転勤させた。

それから七年、僕は現業に精を出した。

工場の周囲は広いキャベツ畑で、視界を遮るものは何もない。正面には筑波山を望むことができた。冬の寒さが身に堪えた。筑波おろしである。もうだめだ――、会社を辞めようと思ったとき、二十世紀も幕を閉じようとしていた。

それから僕は自宅で十五年の間、療養生活を送ることになる。

その後、小康状態を得て、今度こそ本腰を入れて文筆家を目指そうと決意した。僕は五十七歳になっていた。

やがて五十九歳で同人誌随筆春秋の門を叩き、僕はその会員となった。そこでの研鑽の甲斐もあった、僕はその随筆春秋や他誌でいくつかの賞をいただくことができた。

気がつくとも五年が過ぎていた。今、僕は少し焦っている。人生の残り時間が気になるのだ。だが、必ずやり遂げようと思っている。

僕はずっと小説家になりたいと思ってきた。その思いは今も変わらず続いている。